

## 長澤先生に感謝

杵屋五三吉ひろやす【杉浦弘晏】

45年前、第1回定期演奏会における「子どものための組曲」の演奏は、古典の中で稽古を重ねてきた私にとってはまさに異質の世界での本番。無我夢中で弾き終え感動を覚えたものです。美しい旋律を活かすための新しい奏法の工夫など、作曲家との共同作業を実感しました。三味線が活躍するこの曲が、今や日本音楽集団ははじめ多くの方々に演奏されていることは感無量です。初演に向けた伊勢原市大山での合宿は青春の良き思い出となりました。

## 三絃独奏曲「玉桂」

杵屋静子(長唄杵勝会々員)

1981年秋、第5回リサイタルのための委嘱である。第一稿と書かれた楽譜を送って頂いた。二度程先生のお宅で御指導を賜った。そして改めて楽譜を下された。この様なことは稀有なことと感じ入った。翌年1982年、日本音楽集団の定期演奏会に「玉桂」で出演した。先生のおっしゃった言葉の一つ「委嘱も嬉しいけれど再演を」。なかなか実行出来ず申し訳ないと思っております。

## 祈り

坂井敏子(日本音楽集団名誉団員)

「子どものための組曲」「人形風土記」。命溢れる未来への希望を。日本各地の自然の中で生きる人々の優しさに育まれた人形達。此二つの組曲は多くの人に、忘れた心を美しく取りもどさせて下さいました。太平洋戦争中の、南方の島での凄惨な生地獄から生還され、戦後作曲された此等の組曲。深い悲しみから先ず祈り、祖国の自然に癒され、生きとし生ける者への深い愛へと…。此の名曲が永遠に演奏され続けます様に心からお祈り致します。

## 長澤作品出版の思い出

坂本正彦(大日本家庭音楽会社長)

長澤先生とは昭和60年1月26日京王プラザホテルで、砂崎知子先生のご紹介でお会いしました。黒い大きな鞆を手に、「僕の全財産を持ってきた。」と言われたことが今でも忘れられません。出版第一曲目は「飛騨によせる三つのバラード」と決定し、3月10日に初版は全国に発売されました。以後長澤作品は特定のグループの演奏曲目から邦楽界全体が演奏する曲目となりました。現在長澤作品37曲が不滅の名曲として出版されています。

## 舞台と共にいつまでも

佐藤達雄(人形劇団ブーク代表幹事)

長澤さんのブークに於ける代表作の一つ「12の月のたき火」は1971年の初演から現在まで毎年クリスマス公演として多くのお客様に楽しんでもらっている。美しい旋律で作品世界を拡げてくれる長澤さんの音楽は、人形劇団ブークの創造的エポックとなる多くの作品の中で今も息づいている。「ファウスト博士」、「青い鳥」、「エルマーのぼうげん」。数え上げればキリがありません。これからも舞台で唄い続けていきます。



## 「春三題」に感謝

沢井一恵

長澤先生に初めてお会いしたのは、「春三題」を三絃・沢井忠夫、箏を私で初演した時。

清明にしてとても美しい旋律に出会い、それに見合う音色を、暖色のppの音、透明に冴えわたる音が出る様に、撥・そして箏爪の入射角と流す方向、又、コキやユリ色の多彩性などなど。二人で真摯に探し求めました。初演及びレコーディングで「春三題」から得たものは、二人にとって、とてもとても大きなものだったのです。

## 長澤作品は不滅です!!

白根きぬ子(日本音楽集団名誉団員)

たくさんの人々に愛されている「子どものための組曲」、その第1章は箏の三重奏ではじまります。私はこの美しいメロディーと心地よい躍動感が大好きです。

長澤さん、誰の胸にも素直に優しく響く、珠玉のような作品を沢山残してくださって、本当に有難うございました。どの作品も多くの人の心の中でいつまでも生き続けてゆくことでしょう。長澤作品は不滅です!!

## 長澤節は永遠に

砂崎知子(箏曲演奏家)

長澤先生とは、私が日本音楽集団に入団しました時から30年以上のおつき合いを頂きました。私にとっての思い出は、先生の曲を絃譜にして出版する事になった時、そのお手伝いをし、初めて譜が出来たときはとても喜ばれました。その後続々と先生の曲が絃譜になり、それまで以上に沢山の人の手に弾かれる様になった事は言うまでもありません。先生の美しい旋律は、これからも箏曲を愛する多くの人々に弾き継がれてゆく事でしょう。

## 1973年6月24日深夜

田中隆文(邦楽ジャーナル)

ラジオから流れてきたのは『錦木に寄せて』。18歳のときでした。コ、コレハ! 「ニジュウゲンソウ」というのが草の名前でないことは分かるけれど、それが何ものなのか…以来、レコード店に行っては片っ端から「日本」と名のつく現代音楽のLPを買いました。そこに「日本」音楽集団が。長澤勝俊の名前もある!——「邦楽」との幸せな出会いでした。以来35年、邦楽ひとすじですが、あの日の感動は忘れもしません。

## 「恋の歌」

谷 珠美(谷珠美邦楽研究グループ主宰)

柔和で品格のある長澤先生とお逢いしたのは1972年頃と思います。集団の定演で「恋の歌」の演奏依頼をお受けした時でした。宮田耕八朗さんと一緒にわざわざ私宅までお訪ね下さり、設立間もないご苦労話や文化庁から助成を受ける時のご尽力などを和やかにお話を伺いました。「恋の歌」は声楽家の大賀氏と二重唱で、伴奏楽器は笛と打楽器だけでしたでしょうか?とても素朴で美しい曲でした。その後他の方での再演が聞けないのが残念です。

## 「颯踏」の頃を偲んで

藤舎呂船

長澤先生とは、私自身がまだ若く、自分なりに日本の伝統的な楽器による音楽の方向性を模索しておりました時、一つの答として、純器楽曲のあり方を教えられ、そこにこめられた作曲者の魂に触れさせて頂いた貴重な出会いでございました。丁度「颯踏」の初演の頃かと思われ。今、先生亡き後、純粋な美しさに満ちた作品の数々が、日本音楽の宝として、大切に演奏され続けてゆかれます事を祈りつつ、哀悼の念を捧げます。